

## くすり博物館だより

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館 〒501-61 岐阜県羽島郡川島町 Phone: 058689-2101 Fax: 058689-2197



企画展

## 百年前のくすり

～いろいろな病にどんな薬でたたかったか～

11月24日まで開催

百年前の人々がどのような病気にどんなくすりであたったのかをテーマに開催している企画展も、4か月で21,393人の来館者をお迎えしています。

来館者の皆様の感想はさまざまですが、昔から伝わったくすりが身近なところに現存しているということに驚かれた方が多いようです。今回取り上げた薬には、“微粉末”の製剤を「紫雪」という優雅な名前で販売したものもあれば、粉末の薬に加えて錠剤も売り出すなど形状に工夫をしたものもありました。また、製造元や卸売業者が販売促進方法を指導したもの、同じ商品名の薬が販売されたため、商品名だけでは区別がつけにくく、製造元のマークを強調したものもあります。どれも、生き残るために知恵を絞ってきたと言えるでしょう。

これらの資料は、決して華やかなものではありませんが、それだけにひとつひとつよく見ていくと、当時の人々が薬をどのように扱ってきたかを知ることができます。

今回の『くすり博物館だより』は、企画展で展示中の資料を中心にご紹介いたします。

## ▼企画展会場



## ▼紫雪・烏犀円・六神丸に使われた生薬を展示しています。



～展示資料についてより詳しく解説は～

企画展の図録として、『百年前のくすり～いろいろな病にどんな薬でたたかったか～』を発行しました。紫雪・宝丹・ウルユス・烏犀円・六神丸の5種の薬の資料43点を写真で紹介し、効能書などには読み下し文をつけ読みやすくしてあります。

表紙には明治時代のくすり『和胸丸』の広告を使用しました。吐瀉（はきくだし）、宿酔（ふつかよい）、腹痛（はらのいたみ）などの病気を絵であらわし、効能がわかりやすく描かれています。

[1冊500円]





◆◆◆ 効能書の工夫 ◆◆◆



◀▶ 宝丹 (明治 / 31.3×46)

効能書と包みとが兼用になっており、折りたたむと右のようになります。このような形であれば、効能書を失わずにすんだことでしょう。

◆◆◆ 製剤の工夫 ◆◆◆

『宝丹錠ハ明治十年府下熱田彦兵衛ナルモノノ、求メニ因リ原品宝丹ヲ分チ以テコレヲ製セシムル所ナリ故ニ其効大薬宝丹ニ等シケレバ…』 効能書には、要望に応じて錠剤を販売するに至った経緯が書かれています。



◀ 宝丹錠 (明治時代 / 13×8)

◆◆◆ 宣伝の工夫 ◆◆◆



◀ 「ウルユス弘方心得書」



明和～天明年間 (1764～1788年) に発売された「ウルユス」を売り広めるための手引書が、『ウルユス弘方心得書』です。製造元と卸元との連名で、ウルユスの販売店に広め方を指導したもので、口コミが効果的であるとか、ちらしの配り方など12項目にわけて書かれています。



▶ 宝丹売弘用 附属品定価表 (明治10年 / 18×34)



当時、宣伝用の看板やちらしなどはくすりを売り広める店が買い取って使っていました。「宝丹」を製造・販売していた守田治兵衛は、その定価表をわかりやすいちらしにしました。

◆◆◆ 類似品 ◆◆◆

ある薬の効能が人々に認められ有名になると、国内各地で同名の商品が作られました。



肥前の鍋島藩では、富山のくすり売りが隠密化したため、他藩の行商人による配置売薬を禁じました。しかし烏犀円の評判がよいため、藩命で野中家が作り始めました。

▶ 烏犀円 (明治 / 23×17)



◀ 烏犀円 (明治～大正 / 20.3×27) “肥後” 烏犀円の置看板です。

紫雪は“加賀の三大秘薬”のひとつですが、加賀の薬種商の福久屋と中屋が藩主に願い出て調合の許可を得て作りました。

◀◀ 中屋紫雪 (明治 / 128×60)

中屋商店製紫雪の看板。

◀ 紫雪 (明治～大正 / 79×27)

石黒伝六製紫雪の看板。



各地で作られたちらしや看板があります。

▶ 六神丸 (大正 / 15×27)

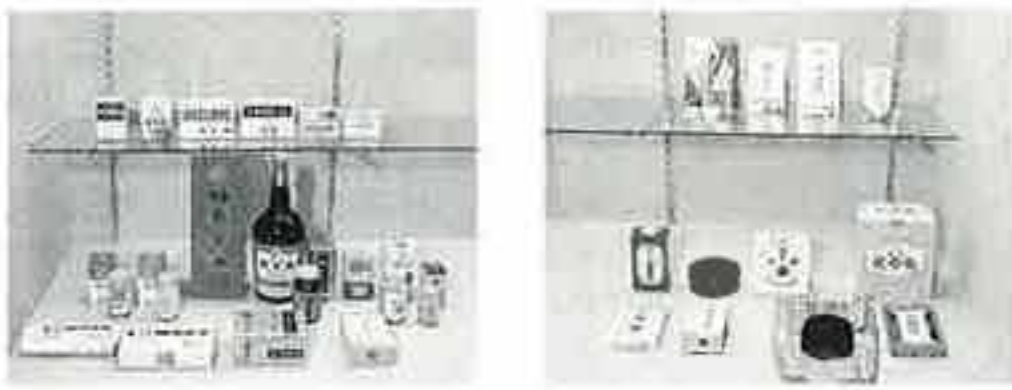
▶ 六神丸 (大正～昭和 / 85×15)



\* 脚注は (時代 / サイズ) の順に記載  
\* 脚注部分の数字の単位はcm



## 現存する伝統薬



当博物館では、日本大衆薬工業協会のご協力のもとに、加盟各社の主力三製品を展示しています。これらの中には、新しい医薬品も伝統薬とされる製品もあります。

今回の企画展でも、現在販売されている伝統薬を調査し、ご提供いただいた製品を展示しております。

### 《今回の企画展にご協力いただいたメーカーと製品のお名前》

- ・アサヒビール薬品(株) [千葉実母散]   ・(株)井上清七薬房 [目洗薬 (井上目薬)]
- ・宇津救命丸(株) [宇津救命丸・宇津救命丸「糖衣」]   ・(株)太田胃散 [太田胃散・太田漢方胃腸薬]
- ・カネボウ薬品(株) [ワカ末止瀉薬錠・八味地黄丸A錠]   ・(株)亀田利三郎薬舗 [六神丸]
- ・救心製薬(株) [救心・救心感応丸]   ・武田薬品工業(株) [タケダ漢方便秘薬・ルビーナ]
- ・(株)ツムラ [中将湯・中将湯ラムール・中将湯ラムールQ]   ・長野県製薬(株) [百草]
- ・(合)中屋商店 [烏犀円]   ・日新薬品工業(株) [万病感応丸]   ・日野製薬(株) [百草]
- ・樋屋製薬(株) [樋屋奇応丸・金粒樋屋奇応丸]   ・(株)藤井利三郎薬房 [フジイ陀羅尼助丸]
- ・(株)守田治兵衛商店 [宝丹]   ・森林平製薬(株) [浅井万金膏]   ・養命酒製造(株) [養命酒]

~~~~各社の皆様に厚く御礼申し上げます~~~~

(五十音順/敬称略)

### 医薬つれづれ抄

日本国内で売薬が盛んに販売されるようになるのは、江戸時代初期からとされています。そのきっかけとなったのが、中国でつくられた『太平惠民和剂局方』で、これは略して『和剂局方』と呼ばれています。中国宋代の徽宗(きそう)の勅命によって陳師文らが、庶民救済のため、中国各地の名医の秘方をあつめ、処方のおしを行って、有用性の高いものを選んだ国定処方集と言うべきものです。最初に『和剂局方』が刊行されたのは1107

～10年(約890年前)とされています。今回の企画展「百年前のくすり」にとりあげた“紫雪”と“烏犀円”はこの『和剂局方』にのせられているものです。

当博物館にはわが国で翻刻した次の5点があります。

- [1] 重刻太平惠民和剂局方(序目録巻之1～10) 袁元熙; 校正、京都・村上平楽寺板、1647(正保4)年、11冊
- [2] 惠民和剂局方(巻之1～10) 袁元熙; 校正、洛陽・積徳堂板、1671(寛文11)年、5冊
- [3] 惠民和剂局方(巻之1～10) 袁元熙; 校正、梅村弥右衛門(版元)、出版年不明、5冊
- [4] 増広太平惠民和剂局方(序目録・



▲当博物館収蔵の「和剂局方」

巻之1～10・指南総論・図経上・下) 橋親顕ほか校正、皇都・前川権兵衛(版元)、1732(享保17)年、12冊 [5] 増広太平惠民和剂局方(巻之1～10・指南総論) 橋親顕ほか校正、大阪・泉本八兵衛(版元)、1789(寛政1)、9冊

これらの翻刻年を見ますと江戸時代初期から後期にわたっています。また特に[4]には、和剂局方に使われて

### ▼当博物館収蔵の「神薬」とその看板



たと言われています。この薬は水溶液の薬で看板や効能書、薬びんが残っています。大橋

清信氏(『とみやく』平成8年7月号)によりますと「神薬」のもとの処方、英国の秘薬で、英国の『薬局方』に収載された「コロダイン」に近いものであったろうとされています。この「コロダイン」は、日本の『薬局方』(第3版/1906)に「複方クロロホルム・モルヒネ丁幾」として収載されています。その局方には「本品は帯緑黄褐色の液なり注意して貯ふべし」とあります。注解には「本品は疝痛(せんつう)・下痢・霍乱(かくらん)・嘔吐(おうと)・咳嗽(がいそう)等種々の疾患に5～15滴を用ふ」とあり、製剤も使い方も従来の売薬と違っていて評判になったことでしょう。

- ・翻刻=写本や刊本をもとに新たに版を作り、刊行すること。
- ・疝痛=間をおいて発作的に起こる腹痛。
- ・咳嗽=せき。

## 明治初期の売薬

いる生薬の図と産地などの説明も記されています。1590年に明の李時珍が完成させた『本草綱目』は、生薬原料の採取やその使い方などが書かれたもので、わが国で最初に翻刻されたのは、1637年(寛永14)とされています。この書によって、『和剂局方』の処方の妥当性が理解されたのでしょう。このような文献があったからこそ江戸時代に“紫雪”や“烏犀円”のようないろいろな売薬を作ることができたのでしよう。

明治時代になって、松本順が劇毒薬が使われている売薬が放任状態にあることや、偽薬も出回っていることを憂い政府に意見書を提出、毒劇薬取締規則などが布告されました。こうして明治初期には漢方処方の中から毒劇薬を除いた薬や、烏犀円や六神丸のように処方を一部替えた薬、西洋処方の薬が出回るようになりました。松本順はボンベに西洋医学を学び、明治になって初代陸軍軍医総監になった人で、この頃西洋処方薬として“神薬”を紹介し

くすり博物館館長 岩井鑛治郎



西双版纳(シーサンパンナ)の植物

前回、雲南省西双版纳傣(ダイ)族自治州での植物調査の概要を報告したので、今回は調査の合間に見た市場や地元の人々の生活圏の植物について紹介する。

1. 勐侖(モンロン)鎮(=村)

の朝市場

暗いうちに起きて20m四方の屋根のある市場の中に入ると、たくさんの屋台の店が出ていた。日用品から野菜類、豆腐、味噌、漬物、魚、乾物などが通路の両側に所狭しと並べられ、売る人買う人で混雑していた。

野菜類のうち果菜類は、キュウリ、トマト、ナス、カボチャ、トウガン、ユウガオ、トウガラシ、ハヤトウリ、ニガウリなどが見られた、トマトは粒揃いはよくないが、日本のそれよりも色艶もよく、見るからにおいしそうに見えた。また、時期はずれのためか、パンの実、パラミツの未熟果やタマリンドは見られなかった。

根菜類では、タマネギ、ニンジン、サツマイモ、ジャガイモ、サトイモ、形がカブに似たクズイモ(マメ科)など。

ドクダミの根茎があちこちで山積みされ売られていたのは珍しかった。ドクダミは、日本で全草を薬用茶などに

利用はするが、根茎だけを一体どのように使うのか知りたかった。しかし、通訳の方に確認できず、残念であった。

葉菜類では、キャベツ、ハクサイ、ネギ等のほか、日本ではあまり食べられないバジル、コリアンダー、ハッカ、ドクダミの茎葉なども並べられていた。果物はバナナのみ。漬物としてはラッキョウ、ニンニク、ダイコン、ニラ、ザア菜などを見ることができた。

また香辛料は、粉末になっているので判別できないものがほとんどであったが、ホール(実や種子のままの香辛料)で見分けがついたものとしてはカルダモン、ナツメグ、ナツメなどがあつた。

2. 少数民族と植物

西双版纳傣族自治州では、傣族が水田耕作を行いながら、家屋の周りにタマリンドやココヤシ、バナナなどを植えて利用していた。また、哈尼(ハニ)族は、高床式の家屋に住み、やはりその周りにバナナ、マンゴー、ザボンなどを植えていた。

一方、基諾(ジノー)族は焼畑農業が主体で、陸稻(おかぼ)やトウモロコシ、大豆、茶を栽培し、普洱(プーアル)茶の生産を行っている。

そのほか山野で野生植物を採取して利用しているが、昆明植物研究所の龍

(ロン)先生によれば、彼等は170種以上の食べられる野生植物を知っており、その中から利用価値の高い50種以上の植物を馴化(じゅんか)させて栽培しているとのことである。私が調べたところでは、日本で食用として利用できるものは120種ほどで、日常的に利用されているものはその一部でしかない。と考えると、彼等の識別能力と利用方法が長く伝承されてきたことには驚かされた。

現在、中国政府は少数民族に焼畑農業から定住農業への転換をするよう指導しているとのこと。また傣族や哈尼族では、先に述べたように家屋内や家屋付近で植物を栽培するキッチンガーデンを政府が奨励している。今後、このように現代化する中で、彼等の伝承する知識と様々な技術がどのように継承されていくか、そして彼等の生活圏の植物がどのように変化していくのか、見守っていききたいものである。

● 馴化=もともとの成育環境とは異なった環境に移された植物が、次第にその環境になじんだ性質を持つようになること。

● 普洱(プーアル)茶=雲南省で生産される後発酵茶。

薬用植物園 白井英夫

～新収蔵資料を  
ご紹介します～

◆バイエル薬品株式会社より  
戦前の薬品をいただきました



医薬品や店頭で販売される大衆薬のメーカーであるバイエル薬品株式会社より、同社で戦前に日本国内で販売していた薬品を中心に55件87点の薬品をご寄贈いただきました。

これらの薬品には、「バイエル薬品合名会社 製造」と書かれていました。この社名が使われていた時期から、これらの薬品が製造されたのは、昭和5～11年の間とわかりました。今では薬品には、製造年月日や使用期限などが書かれていますが、戦前の薬には書かれていません。ですから、これは年代の判明した珍しいケースといえるでしょう。

いただいた薬品には、初期のバイエルアスピリンや赤色プロントジルなど貴重なものが多く含まれています。

とびっくす

◆夏休みの定番になりました

夏休み子ども教室が今年も開催されました。毎年人気のカレー作りとポマダー作りの組み合わせで、一日たっぷり楽しんでいただけたようです。参加者は、7月27日(土)・28日(日)あわせて45名でした。

◆ジェンナー200年祭が開催されました



1996年は、ジェンナーが種痘に成功してから200年目にあたります。世界各地でその記念行事が行われ、日本でも、5月25～26日に国際講演会とシンポジウムが開催されました。その会場で、くすり博物館の天然痘に関する図書・資料の記念展示がありました。図書は牛痘(牛の天然痘をうえる方法)関係の図書を含めて48点、資料は、ほうそう(天然痘の古い呼び名)除けの玩具やほうそう絵、予防接種を勧めるちらし、天然痘の患者探しのポスターなど115点、パネル6点を展示しました。

◆錦絵広告のコーナーができました



昨年企画展で好評だった錦絵広告が常設展示になりました。錦絵広告や絵びら、うちわ絵が展示されています。古きよき広告をお楽しみください。

資料・図書のご寄託者・ご寄贈者  
ご芳名

- 秋田そのえ 石川病院 石原理年
- 井出研 茨城県立中央病院 伊吹ふみ子
- 岩佐宣秀 ウチダ和漢薬(株)
- 大滝武雄 太田三郎 大槻彰 奥沢眼科医院 織田隆三 小野尚香
- 片桐一男 片桐平智 金古弘之
- 茅原弘 肺結核予防会 国立歴史民俗博物館 佐藤允男 柴田保彦 誠文堂
- 新光社 須恵町歴史民俗資料館
- 田口幹夫 陳玉麟 寺沢孝明
- 豊田勤治 長門谷洋治 市立長浜病院
- 野中杏一郎 バイエル薬品(株) (有)浜野
- 顕微鏡 藤田孟 本田百合子
- 壬生町立歴史民俗資料館 森納
- 山川浩司 (敬称略)

～ありがとうございました～

館長 岩井鐵治郎 学芸員 稲垣裕美(編集担当)、朝倉加代 学芸員・司書 野尻佳与子、伊藤恭子 庶務 森田麻起子  
 説明員 小島敦子 薬用植物園 主任 白井英夫、栗本省三、松尾三雄 顧問 青木允夫 アドバイザー 逸見誠三郎  
 内藤記念くすり博物館 開館/9:00~16:00 休館/月曜日・年末年始 [12/28~1/8]